

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、男ありけり。女のえ得^①まじかりけるを、A年を経てよはひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「Bかれは何ぞ。」と^①なむ男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡籙を負ひて戸口に居り。はや夜も明け^②なむと思ひつつ居たりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎに^③え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひ^④しとき露と答へて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにて居たまへりけるを、カかたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下藤にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返したまうてけり。それを、クIとは言ふなりけり。まだいと若うて、E後のただにおはしけるときとや。

問 二重傍線部①・②の助動詞の意味を、それぞれ答えよ。 知

答 ① 打消推量 ② 過去

問 波線部1・2の「なむ」と同じものを、それぞれ選べ。 知

- ア もと光る竹なむ一筋ありける。 イ 日もすでに暮れなむとす。 ウ 願はくは花の下にて春死なむ
エ いっしつか梅咲かなむ。 オ はやく去なむとて、

答 1 ア 2 エ

問 傍線部Aはどのようなことを言っているのか。最も適当なものを、次から選べ。 思

- ア 女のもとを離れて暮らしていた男が、何年か経つてようやく女の前に姿を現したということ。
イ 愛する女への恋心を諦めきれないでいた男が、何年もの間ずっと求婚し続けてきたということ。
ウ 自分の思いを女に告げられなかった男が、年とともに女への愛情を口にするようになったということ。
エ 苦心の末にやっと愛する女と結婚することができた男が、ずっと幸せに暮らしていたということ。
オ 周囲から警戒される中、男と女が長年こつそりと男女の関係を持ち続けてきたということ。

答 イ

問 傍線部Bの指すものとして最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 男 イ 川 ウ 露 エ 鬼 オ 蔵

問 傍線部 C・D を、それぞれ現代語訳せよ。思

答 ウ

問 本文中の和歌について、次の問いに答えよ。

答 C 聞くことができなかった。 D 容貌がとても美しくていらつしやつたので、

(1) 「消えなましものを」を現代語訳せよ。思

(2) 和歌に込められた男の心情として適当でないものを、次から選べ。思

ア 悲嘆 イ 悔恨 ウ 自責 エ 絶望 オ 屈辱

答 (1) 消えてしまえばよかったのに。 (2) オ

問 空欄 I に入る適当な言葉を、本文中から抜き出せ。思

答 鬼

問 傍線部 E とはどういうことか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 后が入内前の臣下の身分でいらつしやつたとき。 イ 后がただ部屋でくつろいでいらつしやつたとき。

ウ 后に求婚者がたくさんいらつしやつたとき。 エ 后になって初めて内裏にいらつしやつたとき。

オ 后が物心もつかない子供でいらつしやつたとき。

答 ア

問 文章を読んだ後に、五人の高校生がそれぞれ感想を述べ合った。明らかに読み誤っているものを、次から選べ。思

ア 「年を経てよばひわたりける」に男の愛情の強さが表れているよね。だから結末がかわいそう。やつと一緒になれたのに。

イ 「からうじて盗み出でて」という部分にも同じ効果があると思うわ。簡単に駆け落ちできたのでは、物語も台無しって感じ。

ウ 「はや夜も明けなむ」と思っているのに、「やうやう夜も明けゆく」のは何ともじれたいね。待つ時間というのは残酷だよなあ。

エ 「男」は武器を背負っているから、「あばらなる蔵」に鬼が出そうなのはわかっていたんだろかね。それでも「女」を守れなかった。

オ 「足ずりをして泣けども」という「男」の行動からは、愛する「女」を失った現実をどうすることもできないもどかしさが感じられるね。

答 エ

問 自分が「男」だったならば、どのような歌を詠むか。「白玉か…」の部分にあてはまる現代語の短歌を自由に創作せよ。主

答 (略)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、男ありけり。¹女のえ得まじかりけるを、年を^①経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を^②率て行きければ、草の上に置きたりける露を、^A「かれは何ぞ。」となむ男に問ひ¹【けり】。行く先多く、夜も^③更けにければ、^B鬼ある所とも知らで、^C神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、^D男、弓・胡籙を負ひて戸口に居り。はや夜も^④明けなむと思ひつつ^⑤居たりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。^E「あなや。」と言ひ¹【けり】ど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。^F足ずりをして泣けどもかひなし。

^G白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを

問 二重傍線部①～④の動詞の活用の種類をそれぞれ答えよ。 知

答 ① 八行下二段活用 ② ワ行上二段活用 ③ 力行下二段活用 ④ ワ行上二段活用

問 〔一部Ⅰ・Ⅱの「けり」を、それぞれ適当な活用形に改めよ。 知

答 Ⅰ ける Ⅱ けれ

問 波線部1を単語に区切るとどうなるか。最も適当なものを、次から選べ。 知

- ア 女／の／え／得まじ／かり／ける／を イ 女／の／え／得／まじかり／ける／を
ウ 女／の／え／得まじ／かりける／を エ 女／の／え／得／まじ／かり／ける／を
オ 女／の／え得／まじかり／ける／を

答 イ

問 波線部2の文法的説明として最も適当なものを、次から選べ。 知

- ア 「明け」は力行下二段活用の動詞「明く」の未然形、「なむ」は他への願望を表す終助詞である。
イ 「明け」は力行下二段活用の動詞「明く」の連用形、「なむ」は他への願望を表す終助詞である。
ウ 「明け」は力行下二段活用の動詞「明く」の未然形、「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の終止形である。
エ 「明け」は力行四段活用の動詞「明く」の已然形、「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の終止形である。
オ 「明け」は力行四段活用の動詞「明く」の已然形、「なむ」は他への願望を表す終助詞である。

答 ア

問 傍線部Aは女の発言であるが、この発言からどのようなことがわかるか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 女が見知らぬ男に興味を持ち、素性を確かめようとしていること。

イ 待ち受けている危険を女が察知し、男に注意を促そうとしていること。

ウ 女が男の注意をそらし、その隙に男から逃げ出そうとしていること。

エ 夕暮れ時なので視界が悪く、女が露を真珠と見間違えていること。

オ 女の身分が高く、大切に育てられたため、外の世界を知らないこと。

答 オ

問 傍線部Bとは具体的にはどこか。本文中から六字で抜き出せ。思

答 あばらなる蔵

問 傍線部Cを現代語訳せよ。思

答 雷までもたいそうひどく鳴り、

問 傍線部Dの理由として最も適当なものを、次から選べ。思

ア 夜が明けたかどうか確認するため。 イ 追っ手や夜盗の襲来に備えるため。 ウ 女が蔵から逃亡することを防ぐため。

エ どこかに隠れている鬼を退治するため。 オ 翌日に向けて武器の手入れをするため。

答 イ

問 傍線部Eの説明として最も適当なものを、次から選べ。思

ア 女に襲いかかろうとした鬼の恐ろしい声。 イ 女が鬼に襲われる瞬間を目撃した男の絶叫。

ウ 鬼に襲われて息絶える間際に女が発した悲鳴。 エ 鬼を退散させようとして男がかけた呪文。

オ 突然現れた鬼に対して命乞いをする女の懇願。

答 ウ

問 傍線部Fから読み取れる男の心情として最も適当なものを、次から選べ。思

ア 追悼 イ 歓喜 ウ 後悔 エ 感謝 オ 軽蔑

答 ウ

問 傍線部Gの和歌を現代語訳せよ。思

答 「(あれは)真珠かしら、何かしら。」とあの人が尋ねたとき、「露だよ。」と答えて、(露と同じように私も)消えてしまえばよかったのに。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これは、二条の後の、いとこの^①女御の御もとに、^a仕うまつるやうにて居^bたまへりけるを、かたちのいとめでたく。^cおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御^②兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ^③下臈にて内裏へ^d参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返したまう^eてけり。それを、かく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて、^A後のただにおはしけるときとや。

問 二重傍線部①～③の語の読みを、それぞれ現代仮名遣いで答えよ。 知

答 ① によう「^a」 ② しょうと ③ げろう

問 波線部1を文法的に説明せよ。 知

答 完了の助動詞「つ」の連用形

問 破線部 a～d の敬語の種類として最も適当なものを、それぞれ選べ。 知

ア 尊敬語 イ 謙譲語 ウ 丁寧語

答 a イ b ア c ア d イ

問 この段落では、「女が鬼に食われた」というそれ以前の話の種明かしをしている。その内容として最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 女はいとこの女御のもとに出仕する道の途中で、男に連れ去られてしまった。しかし、そのあまりの美貌で通りかかった女の兄弟が気づき、男を捕らえて事なきを得た。

イ 女はいとこの女御と一緒に暮らしていたが、顔立ちがそっくりだったので男が女御と間違えて盗み出してしまった。恐怖で女が泣き出したので、女の兄弟が聞きつけて保護した。

ウ 女はいとこの女御と同室に暮らしていたので、女御と男を引き合わせ、駆け落ちの手引きをした。しかし、女御の兄弟と遭遇したために逃避行は失敗し、女も共犯として罰せられた。

エ 女はいとこの女御の部屋に居候していたが、男と相思相愛になりこっそり駆け落ちした。しかし道中で男が罪の意識から泣き出したので、女の兄弟に見つかってしまった。計画は失敗した。

オ 女はいとこの女御のもとにお仕えしていたが、容貌が大変美しかったので男が懸想して宮中から盗み出した。しかし、逃げる途中で女の兄弟に見つかり、女は連れ戻された。

答 オ

問 傍線部Aとはどのようなときか。具体的に説明せよ。思

問 以下（授業の一節）を読み、分析として最も適当な発言を、後から選べ。思

教師「『伊勢物語』は今に至るまで長く読み継がれている古典中の古典です。特に「芥川」の話はよく知られ、ここからさまざまな文学や芸術が派生してきました。絵画作品においては、男が女を負ぶって川沿いを逃げていく次のような絵柄が、江戸時代前期以降定着していきます。また、「芥川」の文章とこの絵柄を念頭に置いた江戸時代の川柳に「あくた川どつちも逃げるなりでなし」というものがあります。この句のおもしろみはどこにあるのか、話し合ってみましょう。

答 二条の后がまだ入内する前の臣下の身分でいらっしやったとき。

ア 生徒A―宮中から慌てて逃げてきたので、どつちに向かったらいいのかわからず困っている様子を、第三者の視点からユーモアを込めて詠んだ川柳だと思うよ。二人ともあたりをきよるきよる見回しているみたいだもん。

イ 生徒B―逃避行にしては衣装が豪華すぎるということを茶化しているんじゃないかな。十二単はすごく重いつて聞いたことがあるし。男も裾を引き上げているようだけど、女を背負って逃げるのには向きな服装だよね。

ウ 生徒C―「どつちも」というのは、「男も女も」ということか。二人が川べりの風流な景色に目を奪われて立ち止まっていることへの違和感を表した川柳なんじゃない？ 今のマンガなら脇目も振らず逃げる姿を描くはずだよ。

エ 生徒D―男が女をずっと背負って逃げたとは考えにくいよね。もしかしたら手を引いて二人で走ったかもしれないし、途中で馬に乗ったかもしれない。「背負ったとは限らない」という論理的なほころびを、鋭く突いた句だと思っうな。

オ 生徒E―そもそもこの時代、身分の高い男女が二人きりで逃げるなんてことは現実的じゃなかったはず。この話はいくまでフィクションだということをおもしろおかしく大衆に示そうとした、啓蒙的な川柳だと考えられるね。

答 イ



次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、右近の中将在原業平といふ人ありけり。いみじき世の色好みにて、世にある女のかたちうるはしと聞くをば、宮仕へ人をも人の娘をも見残すなく、^A 数を尽くして見むと思ひけるに、ある人の娘の、かたちありさま、世に知らずめでたしと聞きけるを、心を尽くして、いみじく懸想しけれども、「やむことなからむ婿取りをせむ。」と言ひて、親ども、めでたくしづきければ、業平の中将、力なくしてありけるほどに、いかにしてかかまへけむ。かの女をひそかに盗み出だしてけり。

それに、たちまちに率て隠すべき所なかりければ、思ひあつかひて、北山科のわたりに、古き山庄の荒れて人も住まぬがありけるに、その家の内に大きな校倉ありけり。片戸は倒れてなむありける。住みける屋は板敷きの板もなく、立ち寄るべきやうもなかりければ、この倉の内に畳一枚を具して、この女を具して、率て行きて伏せたりけるほどに、にはかに雷電霹靂してのしりければ、中将、大刀を抜きて、女をば後ろの方に押しやりて、起きゐてひらめかしけるほどに、雷もやうやく鳴りやみにければ、夜も明けぬ。

しかる間、女、音もせざりければ、中将あやしみて見返りて見るに、女の頭の限りと、着たりける衣どもとばかり残りたり。中将、あさましく恐ろしくて、着物をも取りあへず逃げて去りにけり。

それより後なむ、この倉は人取りする倉とは知りける。しかれば、雷電霹靂にはあらずして、倉に住みける鬼のしけるにやありけむ。しかれば、案内知らざらむ所には、ゆめゆめ立ち寄るまじきなり。いはむや、宿りせむことは思ひかくべからずとなむ語り伝へたとや。

『今昔物語集』

問 波線部 1・2 をそれぞれ文法的に説明せよ。 知

答 1 打消の助動詞「ず」の連体形 2 完了の助動詞「ぬ」の終止形

問 傍線部 A とはどのようなことか。わかりやすく説明せよ。 思

答 業平が、美人はすべて自分の妻にしようと思ったということ。

問 傍線部 B の主語を本文中から抜き出して答えよ。 思

答 親ども

問 傍線部 C 以降の出来事の説明として適当なものを、次からすべて選べ。 思

ア 盗み出した女の隠し場所を求めて、業平は北山科あたりにある古い山荘へと向かった。

イ 山荘の母屋は片方の扉が外れ、板敷きの板もなかったので、業平は女を倉へと連れて行った。

- ウ 倉の中で雷が鳴り響いたので、業平は鬼の仕業だと思い、大刀の刃を光らせて警戒した。
- エ 女を倉の奥の方に据えておき、雷が鳴り止むまで業平は一晚中寝ずの番にあたっていた。
- オ 業平は夜の間に女が鬼に食われたのに気づくと、残されていた女の着物を持って逃走した。

答 ア・エ

問 以下は『伊勢物語』「芥川」とこの文章を比べ読みした後の教室での会話である。(1)傍線部Xについて具体的に説明し、(2)空欄Yに入れるのに最も適当な発言を後から選べ。思

教師——『伊勢物語』と『今昔物語集』は、同じ事件を扱っていますが、その書きぶりはまったく異なっています。その違いについて話し合ってみましょう。

生徒A——まず、主人公の名前が違うよね。『伊勢物語』は「男」なのに、『今昔物語集』は「在原業平」という実在の人物名になっている。

生徒B——女を盗み出すまでの経緯にも違いがあるね。『伊勢物語』は一人の女性への純愛を貫いた結果という描き方なのに、『今昔物語集』は手当たり次第に美人を口説いた後のことになっていて、何か嫌な感じ。

生徒C——見してわかる大きな違いは、和歌の有無じゃないかな。あと、女について、『伊勢物語』では「鬼はや一口に食ひてけり」「率て来し女もなし」とさらっと書いているのに、『今昔物語集』は「女の頭の限りと、着たりける衣どもとばかり残りたり」と具体的に恐ろしい描写がしてあるよ。

生徒D——私は文章の結びに注目してみたよ。『伊勢物語』は歴史的な事情を後付けして種明かしをしているけど、『今昔物語集』はX格言つぽい内容で結ばれている。それにしてもこの終わり方、あまりにもドライだと思わない？

教師——みなさんそれぞれよい指摘をしてくれました。Y

ア 『伊勢物語』は地の文と和歌が融合した完成度の高い文学となっているのに、『今昔物語集』はいたずらに怖がらせるだけの作品になっていることがわかったと思います。やはり和歌の有無で文学的価値の差は明らかになるのですね。

イ 『伊勢物語』は最後に種明かしをするミステリー小説のような趣があり、『今昔物語集』は創作要素を排除したノンフィクションのようなリアリティーがあることがわかったと思います。今も昔も、文学にはさまざまなジャンルがあるのでですね。

ウ 『伊勢物語』は和歌を中心としたロマンチックな物語として書かれており、『今昔物語集』はリアルで教訓的な説話として書かれていることがわかったと思います。歌物語と説話というジャンルの違いがいたるところに表れていますね。

エ 『伊勢物語』は鬼は実際には存在しないと否定しているのに対し、『今昔物語集』は鬼の存在を肯定している点が対照的であるということがわかったと思います。同じ事件でも作者の信条によって、こんなにも書きぶりが異なってくるのですね。

オ 『伊勢物語』は男と女の純愛と逃避行に単純化されている一方、『今昔物語集』は男の恋愛遍歴も細かに描き、より多面的な描かれ方をしていることがわかったと思います。文学も時代を追うごとに完成度が高まっていくのですね。

答 (1) 様子 of わからない所には、決して立ち寄ってはならず、ましてや、泊まるようなことは考えてはいけないということ。(2) ウ